

発 達 (乳・幼児期)

乳幼児期に関する発達心理学的研究の 最近の動向と今後の課題

中 島 誠
(京 都 大 学)

1 はじめに——発達心理学の課題——

乳幼児期に関する発達心理学的研究の最近1年間の動向をみるために、教育心理学研究34巻3号(1986年9月)から35巻2号(1987年6月)までと日本教育心理学会第29回総会発表論文集(1987年)との乳幼児を対象とする発達心理学の論文に目をとおした。すると、ショッキングなことに気づいた。それは、ある問題を断片的にちよこつと取り上げ、ちよこつと実験し、ちよこつと発表したものが非常に多いということである。こういう姿に接して次のことを思い出した。

それは、1982年の日本教育心理学会第24回総会のとき、岡宏子が司会した特別報告シンポジウム『発達における関係の分析』において、「発達心理学の領域で研究発表する人が多くなったのに、かんじんの発達心理学が発達しないのはなぜか」ということが問題になったことだ。この年、全体の発表件数のうち、発達の領域での発表が約30パーセントで一番多かった。同じ年に開催された日本心理学会第46回大会で岡本夏木が企画したシンポジウム『発達研究の再検討』においても、同じ問題が提起された。この年の日本心理学会での発表のうちで、発達の領域での発表が一番多かった。

1982年の日本教育心理学会総会のあと、発達心理学を発達させるためにどうしたらよいかということを考えることをも課題として、発達研究懇話会がつくられ、毎年、日本教育心理学会総会の折に、この懇話会がもたれている。その中で話題の中から、この課題を乗り越えるために検討するに価するものを2つ取り上げたい。

1つは、古澤頼雄の発言で、「発達に関する資料は、人間の生まれてから死ぬまでの生涯の発達過程の中へどう位置づけられるかを検討すべきである」という考えだ。全生涯の発達過程の中へ位置づけるということとは出来ないにしろ、せめて何年かにわたる発達過程の中にどう位置づけられるかの検討はなされるべきで、ある時期における断片的な資料だけであってはならない。しかし、ただある年齢からある年齢にまたがった資料であればよいということではない。

2つ目の話題は、中島誠が発言したことであるが、こ

れは、園原太郎が『認知の発達』(1980, 培風館)で述べていることでもある。園原によると、従来の発達心理学の発表の中には、ある1つの機能を取り上げて、それが年齢によってどのように変化しているかを述べたものが多いが、これは成長の資料にすぎず、発達研究とは呼べない。発達の研究が目ざすべきことは、子どもが次々に経過していくそれぞれの発達段階の特徴を明らかにすることである。ある発達段階は、いくつかの機能が相互にどのように関連し合っているかによって特徴づけられる。ある発達段階におけるいろいろな機能の関連し合い方が、その次の段階ではどのように発達の的に変化するか、さらにその次の段階へはどのように発達の的に変化していくのか、ということをはっきりさせることが大切である。このようなことが少しでも明らかにされないかぎり、発達心理学は発達しない。ある機能を取り上げて問題にすると、その機能だけを断片的に取り上げるのではなく、ある発達段階においてその機能が他のいろいろな機能とどのように関連し合っているのか、その関連し合い方が次の段階ではどのように発達の的に変わるのかということ、少しでも明らかにしていくことが大切である。

われわれが研究を進めようとするとき、いろいろな文献を参考にする。その場合、英語で書かれたアメリカの文献に接することが多い。英語の論文を読むと、玉石混交、玉と石とがごちゃまぜであり、しかも、玉は少なく、石が非常に多いことに気づく。石にふりまわされてはいけない。石の追試をやっても、新しいものは生まれない。

それでは、発達心理学を発達させるような研究を進めるためには、どうすればよいか。研究を始める前に、家庭や幼稚園や保育所で、ひとりひとりの子どもとつきあい、ひとりの子どもを全体としてとらえ、研究の対象としようとしているある機能が他のいろいろな機能とどのように関連し合っているか、その関連し合い方がどのように発達の的に変化していくのかを、まず、はだで感じることである。子どものなまの生活に接し、そこではだで感じたことを整理し、それをもとにして実験計画をたてる必要がある。しかし、子どものなまの姿から、実験場面で検討すべき要因を抽象することは、なかなか困難な

ことである。まだまだ、子どものなまの姿をきめこまかく観察するという研究を、じっくりやっていかなければいけない。発達心理学では、このような観察的な研究と実験的な研究とが、車の両輪となって、相補的に進められるべきであろう。その点、ひとりの子どもの観察記録の発表がみられるようになったのは、歓迎すべきことだ。

ひとりの子どもを取り上げて研究しようという場合、障害をもたない子どもでは、いつのまにか、あれよあれよといううちに、次々と発達段階を越えていき、機能連関的な発達の機制を明らかにすることがとても困難である。その点、障害をもつ子どもの場合、いくつかの機能が、何らかの条件で、ある発達段階から次の段階へと発達の飛躍することを阻害されていると考えられる。したがって、いろいろな医療的、教育的な配慮をしていくうちに、機能連関的な発達の機制を明らかにするきっかけが与えられることがある。この点に関して、障害児の治療・教育を発達のみにていこうとする研究がみられるようになったことは、喜ばしいことだと考えられる。

つぎに、このような観点から、最近1年間の研究を検討しようと思うが、論文のなかには、どのような方法で実験なり観察なりをしたのかよくわからないものがある。特に、日本教育心理学会総会発表論文集のなかに、このようなものが、あるというより、多いといたい。もちろん、当日の口頭発表できちんと説明すればよい、とも考えられる。しかし、なかには、どのような研究をして、どのような結果がえられたのか、よくわかるように書かれたものもある。読んでわかるような論文を書くことも、研究する者として、当然心すべき課題であろう。

日本教育心理学会総会発表論文集には、どのような研究をしたのかよくわからないものもあるので、教育心理学研究の論文を中心に、発表論文集の論文の主なものについて述べ、さらに、1987年度の日本心理学会第51回大会発表論文集の中から若干取り出して論ずることにした。なお、原稿ノ切の期限が過ぎてしまっており、日本教育心理学会総会発表論文集の論文は、すべてに目を通すことが出来なかった。論及できなかった論文の執筆者には、おわび申し上げる次第である。

2 乳児期の研究について

年齢を追って、乳児期の論文を検討していく。

田村あおいら(1987)は、出産直後と2か月の時、乳児が泣き始めてから母親が抱くまでの時間(介入潜時)と乳児が泣きやむまでの時間とを算出した。泣きやむまでの時間が長い乳児群では、2か月の時には、母親の介入潜時が、新生児の時より増大した。

これは、乳児の泣くことと母親の養育との相互のかかわりをみようとしたもので、興味ある資料を提供してい

る。母・子のかかわりをより多面的にみることで、2か月までのかかわりがそれからあとの段階へのかかわりへどう発達していくかを検討することをお願いしたい。

塚本妙子(1987)は、3か月から16か月までの乳児をもつ母親と育児の経験のない女子大生とについて、乳児の「空腹」「眠い」「甘え」「怒り」の泣き声を聞かせ、どのような物理的特性が泣き声を聞きわける手がかりになるのか、検討している。

この研究が、塚本も述べているように、母子相互交渉の縦断的研究の中へどう位置づけられるか、検討していただきたい。

水谷宗行ら(1987)は、新生児、1か月児、3か月児について、 $9 \times 9 \times 9 \text{ cm}^3$ の箱を近づけた時の行動を検討した。新生児から3か月児になるにつれて、「腕を動かす」反応が少なくなり、「目をつむる」反応が多くなっている。

水谷らは、「この方法は非常に簡単で実験とはみなされないかもしれない」と述べているが、日常生活場面で観察も、大いに取り入れていただきたい。

松本真由美(1987)は、同じ乳児について、縦断的に、0.5か月、2か月、3か月のとき、家庭で、泣き、ぐずり、発声と母親のことばかけとをテープレコーダーで録音し検討した。月齢が多くなるにつれて、子どもの音声表出と母親のことばかけの相互交渉の回数と往復回数が増加している。

松本も述べているように、同じ発声であっても月齢によってその果たす役割は違うのであり、泣き、ぐずり、発声が、それぞれの年齢段階においてどのような機能をもつものであるかの検討が必要である。

川上清文ら(1987)は、1人の男児について、生まれてから2歳まで、対人的行動、情緒・知的行動の発達を分析している。

子どもを多面的にみようとしたのはよいが、行動発達を日誌に記し、それを資料としている。この点、最近よく行われているように、ビデオの活用が望ましい。書く記録だけでは、記録もれが心配である。

竹内伸宜ら(1987)は、5名の乳児を縦断的に観察し、1か月、3か月、6か月のときの母子相互作用をみている。6か月になるほど、「母親を見る」「頭の向き」「微笑」などが共起するようになり、1つの行動が他の行動との協応のもとに体制化していくと述べている。

この観点は大切である。さらに多面的に機能連関的な発達の变化を段階を追って検討していただきたい。

山本政人(1987b)は、大人の視線や指さしに子どもがどう反応するかを、実験Iでは、3か月、5か月、6か月、7か月児に対象物なしで、実験IIでは、3か月、

5か月、8か月児に対象物を用いて、比較検討した。

視線、指さしなどは、子どもの外界認知の発達との連関において検討されるべき課題である。

一谷聖子ら(1987)は、1人の男児について、出生から1歳まで、母親、同月齢他児、鏡映像などの他者との交わりを通して、自己認知の発達を検討している。

一谷も述べているように、ひとりの子どもの発達を全体的にみていくなかで、自己認知の発達をみようとしていることは、好ましい発想である。しかし、自己認知の発達に関する理論構成は非常にむずかしい。最近展開されているいろいろな親子関係の発達の理論をも考慮して、慎重に進めていただきたい。

天野幸子ら(1987)は、5名の乳児の、7か月、10か月、12か月時に、ガラガラ操作の模倣行為の出現を、母親が子どもの手を取って「共同行為」をした場合、母親が子どもとは別に「並列行為」をした場合について観察している。

模倣の出現は、子どもの母親認知の発達や感覚運動的な動作の発達などの連関において考察されるべきだ。

長崎勤(1987)は、女兒1名について、出生から12か月まで、日誌とビデオとにより観察記録し、対人的伝達行動を、自分の要求等を満たすために人に伝える「実用的伝達行為」と、人に関わることを目的とした「相互的行為」との2つの側面から捉え、その中で giving 行動の成立を見ようとした。そして、対人的伝達行動の発達は、従来考えられた図式よりも更に複雑で力動的なプロセスであり、その中で模倣、giving、指さしなどが産出される、と述べている。

ひとりの子どもの実際の発達の姿を追っていくと、これまで発達心理学が明らかにしてきたことは、実際の発達の機制のごく1部にすぎず、ほとんどの発達の機制はまだよくわかっていないことがよくわかる。発達心理学を発達させる研究は、この長崎がはだで感じたことから始まる。

山本政人(1987a)は、6か月、10か月、14か月の乳児に、積木を「はい、どうぞ」とわたしたあと「ちょうだい」と言い、この提示・要求を、普通に行った場合、積木を握ったまま行った場合、視線をそらして行った場合などについて、子どもの反応を分析した。乳児の対人的理解の発達は、いわゆる3項関係と結びつけて考えることができる、と述べている。

3項関係というのは、子どもは、はじめは、自分と母親、自分と物、それぞれ2項の関係しかつけれないが、乳児期の終りごろになると、自分と母親と物との3項を関係づけられるようになる、という考えである。しかし、子どもは、4か月ころから、未分化ではあるが3項関係

を成り立たせる。問題は、子どもが、親とのかかわりにおけるいろいろな機能や、物とのかかわりにおけるいろいろな機能を、発達段階を追って、どのように連関させるようになっていくかという、よりダイナミックな過程を、子どもの観察をとおして明らかにしていくことである。

村瀬俊樹(1987)は、女兒1名について、9か月から14か月まで、タンバリン、キューピー、ホースに対する自発的な反応と、実験者が、それぞれを、「タンタン」、「ネンネン」、「トントン」といって叩いてみせてそれにどう反応するかを検討した。9-10か月では、叩くシエマが安定して出現していたが、12か月にはあまり叩かなくなり、13か月ではそれぞれに独自のシエマを行使するとともに音声をも伴うようになった。

村瀬も述べているように、子どもは、大人の動作シエマや音声シエマによる意味づけを取り込み、自分なりの意味の場を形成していくのであり、この研究は、言語発達の研究へと発展するものである。子どもが、家庭において親と、保育所において保母と、どのようにかかわりながら、このような取り込みをしているのか、ということとの関係をも検討する必要がある。

天野幸子ら(1987)は、7か月、10か月、12か月の乳児について、ものの永続性の課題場面では実験者にどう反応するかをみることにより、ものの永続性の発達を人とのかかわりとの関係で検討した。10か月から12か月にかけて、結果を人と確認する行動が増え、12か月児では、人への定位のある子どもが、永続性とは別に行った模倣課題でより多く反応した。

ものの永続性を人とのかかわりとの関係で検討しようとしたのは評価される。しかし、このような検討は、すでになされている。この問題も、人や物に関する外界認知の機能連関的な発達過程との関係において考慮されるべきである。

白石恵理子ら(1987)は、大津市における乳幼児健康診断体制における10か月健診を取り上げ、その発達の課題を検討している。10か月では、運動・姿勢に関する各項目の通過率をみると、障害児群が非障害児群より低い。

大切な資料であるが、この論文の表現の中で、乳幼児健診の事情を知らないとわからない表現が少なくない。わかる表現を工夫していただきたい。

大久保愛(1987)は、1男児について、1か月から12か月まで、音声を録音し、行動を観察している。音声模倣がことばの獲得にとって重大であると述べている。

この指摘は大切であるが、音声模倣がことばの獲得のどの面でもどのように大切であるかの分析がまたれる。

村井潤一ら(1987)は、4つの連続した発表の中で、

89名の子どもについて、6か月から18か月まで縦断的にあつかい、月1回K式発達検査を実施し、既製の発達検査では捉えきれない言語獲得に関連する課題について質問紙を作成して面接で親にたずね、独自に作成した絵本を子どもに見せた場合の反応や、要求行動誘発場面をつくってそれに対する子どもの反応などを分析し、言語をも含めて言語に直接間接関係ある行動を広く取りあげてその機能連関的発達過程を検討している。そして、全体としての統計的処理の結果だけでなく、何人かの事例についても報告している。11か月前後に質的転換がみられると述べている。

もともと言語発達を見ようとする研究であるが、言語だけを取り上げるのではなく、子どもをできるだけ全体的にとらえ、発達の機能連関過程を検討しようとしている。まだ、結果をまとめて理論化するところまでには至っていないが、大いにその成果が期待される。さらに欲をいうならば、従来の発達検査や質問紙には、発達の機能連関という発想はなかった。村井グループとして、この研究によってえられる結果に基づき、機能連関的な考察ができるような発達検査を作っていただきたい。

三島正英(1986)は、12か月から18か月までの子ども12名について、ものの永続性の問題の中で、最初の場所Aから次の場所Bへの置き換えを、子どもに見えるように行っても、子どもは最初の場所Aをさがす、という反応を検討している。

この問題は、より多面的な外界認知の発達の過程との関係で考察されるべきである。

平直樹ら(1987)は、子どもの言語理解能力を測定するため、3か月から24か月の子どもを対象とするような乳幼児用言語理解尺度という母親に対する質問紙を考案している。

このような試みも必要であるが、まず、実際に子どもが言語を理解するようになる発達機制を多面的にとらえるべきであろう。

小嶋玲子(1986)は、1人の男児について、6か月から12か月まで、手の機能的左右非対称性を検討している。

小嶋も述べているように、身体運動面やことばなどの発達との関連を検討すべきである。

横山正幸(1987)は、女児1名について、10か月から1歳7か月まで、所有に関する行動発達とことばの発達との関係を考察している。

横山も述べているように、所有に関することばの獲得は、それに関わる認知の発達との連関において考察されるべきである。

瓜生淑子(1986)は、14か月から30か月までの子どもについて、「プー」(車)と「ボール」とを対象語、

「マンマして」と「ネンネして」とを行為語とし、「お人形にマンマして」「ワンワンをネンネして」という日常的なものだけでなく、「プーにマンマして」「ボールをネンネして」など非日常的な教示にどのように反応するかをも検討した。21か月以降、非日常的教示にも字句通りの反応をするようになり、実験者を見るなどの対人的反応がこのような反応と関係があることを示した。

言語発達をこのような視点から検討することは大切である。複雑な言語発達の全体としての過程の中へどう位置づけるかが、今後の課題である。

宮原和子ら(1987)は、男児1名について、8か月から17か月まで、ものの永続性の発達と「ナイ」の発達との関係を分析している。認知発達と言語発達との関係は、これまで考えられたように単純なものではないと述べている。

これは、大切な視点ではあるが、今後、より多面的な機能連関の問題として検討していただきたい。

中島誠ら(1987)、萩尾藤江ら(1987)、川野通夫ら(1987)は、それぞれ1名ずつの口蓋裂児について、2か月ころから2歳ころまで、家庭や幼稚園か保育所での子どもの大人とのやりとりをビデオで記録した。親をカウンセリングして、親が安定した気持で子どもに接するようになると、子どもは元気になって、親とのかかわりにおける情動的認知や外界への働きかけによる動作の認知を発達させ、これらを基盤として言語機能を形成させると述べている。

言語機能が他の機能とどのように関連し合いながら、その関連し合い方を、ある段階から次の段階へとどう発達の的に変化させていくか、検討を試みている。

松島恭子(1987)は、ダウン症児について、庄司留美子(1987)は、難聴児について、対人関係の発達との連関において言語機能の発達を検討しようとしている。

3 幼児期の研究について

吉水ちひろ(1987)は、男児、女児各1名について、2歳0か月から3歳0か月まで、母親との象徴遊びの発達を分析している。

子どもが親との生活でどのように自分の世界を作り、それがどのように象徴遊びに現れているかを検討すべきである。

鈴木情一(1987)は、1人の子どもについて、1歳11か月から3歳1か月まで、比喩的再命名の過程を分析している。

2歳児は、大人とは異なる想像の世界、願望の世界に住んでいる。ライオンの絵を見て、ライオンが絵からぬけだして自分にかみつきはしないかと心配したりする。発達段階に応じて子どもがどのような世界に住んでいる

かを、まず把握すべきである。

前田紀代子(1987)は、女兒1名について、発話開始から3歳ごろまで、動作語と助詞とのかかわりを分析している。

前田も述べているように、幼児の助詞の発達は、関心がどこにあるかという心的態度の変化と関わっている。大人の立場からの品詞の分類だけでは、研究は進まない。

Willenborg(1987)は、1人の子どもの1歳8か月から2歳7か月までの疑問表現の発達を分析している。

他人の資料を分析したものである。発達の研究は、実際の子どもの姿を全体的に観察し、その中でのある機能の分化を分析すべきであり、自分の目で、子どもを観察していただきたい。

田丸尚美(1987)は、保育園の2歳児、3歳児、4歳児について、「おいかけあい」がどのように「おにごっこ」へ発展するかを分析している。

田丸も述べているように、個々の事例に即した分析を重ねることが課題である。

山本利和ら(1987)は、保育園の2歳児と3歳児および1歳児について、空間認知の発達を検討し、1-3歳児でも、系列的な空間能力と包括的な空間能力とが発達し始めると述べている。

山本らも述べているように、より日常的な大きいスケールの空間認知をも扱い、空間表象の発達との連関をとらえるべきである。

松村暢隆(1986b)は、4歳から6歳の幼稚園児について、動物、乗物などの名前を分類させ、幼児のカテゴリー範囲は成人と異なるようだと述べている。

鈴木敏昭ら(1987)は、年少児、年中児、年長児らに、あいまいでない文、あいまいな文を読みきかせ、あいまいさにどう気づくかを調べている。

浅川潔司(1987)は、5歳児、6歳児らに、ある動作をしている図を見せ、何を持ってどうしようとしているかたずねている。

松村、鈴木ら、浅川の3つは、教育心理学研究の論文であるが、何のためにこのような研究をするのか、執筆者にたずねたい。

以下の論文については、年齢は記さない。

脇中洋(1987)は、3枚1組の絵を見せ、「いっしょになるか」「似ているか」たずね、大人からみた概念的関係づけが幼児にどのようにみられるかを分析した。

幼児の世界をとらえようと試みたものである。日常生活の観察も必要である。

大竹信子(1987)は比喩的表現の理解、亀田満(1987)は隠喩的イメージの形成をしらべているが、亀田のいうように、生活世界の中にその基礎を見出すべきである。

竹内謙彰(1986)は、積木叩きと数唱という継次情報処理課題と保存課題とを検討し、松村暢隆(1986a)は、情報が一致する課題と葛藤する課題とに対する反応を検討し、鈴木孝子(1987)は、お話を聞かせてその理解における整合性を吟味している。この3者も、教育心理学研究の論文である。鈴木がいうように、子どもが自分で情報を産出する場合との連関で検討すべき課題である。

久保ゆかり(1987)は、矛盾する2事象とそれを統合する手がかり情報との3文からなる話を聞かせたところ、子どもは、手がかり情報に基づく統合と、新たな事象を想定しての統合とを示した。

岩田純一(1987)は、矛盾事態解消のためのエピソードモデルの例を聞く経験が、後の矛盾解消状況に及ぼす効果を検討した。エピソードモデルが、年中児では防害の効果を持ち、年長児では特別な効果がみられなかった。

久保、岩田の論文は、幼児期の特徴説明の手がかりとなりうる。子どもの日常生活を観察していただきたい。

朝生あけみ(1987)は、子どもに例話を示し、主人公の感情を推測する能力を検討した。

子どもが集団生活でのどのような経験から他者感情を推測するようになるのか検討すべきである。

渡辺弥生ら(1987)は、子どもが話の主人公とどう共感するかということと、母親についての共感性尺度によるアンケート結果との関係を分析している。

渡辺らも述べているように、情動と認知の関係や父親の共感との関係も検討すべきである。

須田治(1987)は、子どもは遊びをさえぎられた時に母親に対しては叫んだりするのに、母親がいなくて実験者だけの時にはそれを抑制すると述べている。

南山真美(1987)は、知能検査場面で、ビデオカメラ撮影者が居る場合と居ない場合、実験者が居る場合と居ない場合とを設定し、他者が居ることによる表情表出が4-5歳の間で変化すると述べている。

須田、南山ともに、家庭や幼稚園などでの観察ともあわせて考慮していただきたい。

古澤頼雄ら(1987)は、縦断的に、幼児期から思春期にかけて、子どもの自己像・他者像の発達を、父親、母親の自己像・子ども像との関係でとらえようとしている。

岡宏子ら、白川公子ら、樋口のぞみら、大野澄子ら(1987)は、母子の相互関係と子どもの発達との関係を、乳児期から縦断的に、面接場面と実験場面とを通して検討し、全体としての傾向と事例とを示している。

古澤らの研究も岡らの研究も、多面的にしかも長期の発達段階にわたって、発達の機制を検討している。教育心理学研究に掲載されているものは、論文としてまとめるためか、断片的であって、発達心理学の発達に役立つ

ものは少ない。古澤ら、岡らの研究をこそ、論文として掲載していただきたいと思うのであるが、早くまとめようとすると、単純化され、ダイナミックな発達の機が見落とされがちになる。じっくり、研究を進めていただきたい。

成田朋子(1987)は、1男児について、自分の世界・他人の世界の認知との連関において、言語発達を検討している。

このような事例研究の積み重ねがまたれる。

佐々木宏子ら(1987)の2つの論文は、4種類の絵本から1つずつ絵を取り出して子どもに見せ、その時の注視行動を調べ、どの絵が好きかなどたずねた。

絵本の内容の理解と関係なしにこのようなことを調べるのは、何を目的とするのか、執筆者にたずねたい。

田代康子、古屋喜美代ら(1987)は、絵本の読み聞かせをし、その途中、感じたことなど自由に発言させ、どのように登場人物の立場に立つかを分析し、登場人物間を行き来したり重なり合ったりして、感情を体験していると述べている。

玉瀬友美(1987)は、「あとでどんなお話だったか聞くからよく聞いてね」と教示する教示群と教示しない統制群などにわけ、物語を読み聞かせ、あとで話を再生させたり、8枚の写真を順に並べさせ再構成させた。再生数では記憶群は統制群より多く再生したが、再構成では有意差はなかった。

田代ら、玉瀬の研究が、子どもの絵本の理解とどう関係するか、検討してほしい。

秋田喜代美ら(1987)は、2つの題材について、それぞれ9枚の挿絵を順に並べて冊子を作り、子どもに、それを見て話を作らせた。4歳児では行為と状態に関して因果的関係を作り出すが、以後次第に心的状態に関しても因果的統合を産出するようになると述べている。

西川由紀子(1987)は、絵本の最初の見開きだけ読んで聞かせ、あとは文字を伏せて絵だけを見せて作話させ、同じことを1年後にも行った。より物語らしいものへ移行したのは、3歳後半から4歳後半になった子どもであると述べている。

内田伸子(1987)は、物語の始めを読み聞かせ、そのあとを、口頭で作文してから文字作文させた群とその逆にさせた群とを比較した。順序の違いによる有意差はなく、口頭作文と文字作文とは小学生になると展開構造が同じになると述べている。

秋田ら、西川、内田の論文は、幼児期の特徴解明に手がかりを与えるものである。より多面的な機能連関を検討していただきたい。

藤崎真知代(1987)は、自由保育における子どもの有

能感・自己像の発達を縦断的にみている。

金田利子ら(1987)は、1人の子どもの保育園における1年半の変化をみている。

藤崎、金田らの論文では、保母の役割がわからない。

丸山良平ら(1987)は、3歳児について、数能力と数スパンとの関係をみている。

丸山らが計画しているように、5歳児までの発達の検討が必要である。

斎藤さゆり(1987)は、分割概念の発達を検討し、4-5歳児でも、「はんぶんこ」から出発して、具体物を分割することが出来ると述べている。

斎藤も述べているように、数量概念との連関で検討が進められるべきである。

渡部雅之(1987)は、実験2において、ピアジェ以来の「3つ山問題」を、「2次元射影」「他視点の理解」「左右・前後の合成」の3つの下位能力から成るとし、下位能力を訓練した。「2次元射影」の訓練が「3つ山問題」解決能力の上昇に有意な効果をもつなどを報告している。

渡部も一部実施しているが、いくつかの発達段階にわたって考察されるべき課題である。

小野瀬雅人(1987)は、幼児、児童について、なぞりと視写の練習が書字機能の習得に及ぼす影響をみている。

絵本の理解や読みなど全体的な言語発達との連関で考察されるべき問題である。

平井誠也ら(1987)は、ミュラー・リヤー錯視を眼球運動との関係で検討している。

より全体的な空間認知の問題の中で考察していただきたい。

福崎淳子(1987)は、上昇音調・下降音調の知覚を単語の上昇・下降アクセントの理解との連関でとらえようとしている。

大切な視点ではあるが、両者の発達の連関をどうとらえるかは困難な課題である。

森重敏(1987)は、幼児の道徳意識について、保育所・幼稚園を通して、通園している子どもの母親に対する質問紙調査を実施している。

保育所・幼稚園での子どもを観察し、保母からも話を聞く必要がある。

伊藤武彦ら(1987)は、日本人について被動作主を表わす助詞「ヲ」の獲得を、朴媛淑ら(1987)は、日本人・韓国人について、それぞれ日本語・韓国語における主題助詞と主格助詞の動作主性の発達を比較している。

小林春美(1987)は、日本人・アメリカ人について、日本人が「〇本」「〇枚」などの助数詞を使うことと、数や図形などの認知の発達との関係を検討し、前者が後者に影響を与えていないと述べている。

宮川充司(1987)は、米国籍幼児2名について、来日して日本の幼稚園に入園してからあとの適応を検討している。

伊藤ら、朴らのような日本人・韓国人の比較、小林、宮川のような日本・アメリカの比較などの研究は、今後の発展が期待される。

山本淳一(1987)は、発達年齢推定3—4歳の自閉症児について、未知刺激が呈示された時、「シラナイ」、さらに「シラナイ、オシエテクダサイ」と言語反応を行う訓練をし、異なる状況への般化をみている。

山本も述べているように、「シラナイ」反応は訓練刺激セット以外への般化がみられていない。

広利幸治ら(1987)は、情緒障害児について、本郷一夫(1987)は、ダウン症児や発達遅滞児について、ともに健常児との集団生活の中での発達を検討し、福田きよみら(1987)は、ダウン症児(発達年齢3歳)について、個別指導での見立て機能の発達を検討している。

山本の論文も含めて、障害児の保育・指導においては、健常児の場合と同じく、家庭での母親との生活、施設での指導者とのかかわり、保育所・幼稚園での保母とのかかわりの3者が補い合って、ひとりの子どもを全体として育てていくことが大切である。

引用文献

- 秋田喜代美・大村彰道 1987 幼児・児童のお話作りにおける因果的産出能力の発達 教育心理学研究, 35, 65—73.
- 天野幸子・松崎美津子・毛塚恵美子 1987 永続性課題における人への定位——7か月児, 10か月児, 12か月児について—— 日本教育心理学会第29回総会発表論文集, 264—265.
- 天野幸子・松崎美津子・毛塚恵美子 1987 模倣行為の出現と母子同調行動について——7, 10, 12か月児におけるガラガラ操作の場合—— 日本教育心理学会第29回総会発表論文集, 266—267.
- 浅川潔司 1987 動作心像の言語的表出に関する発達の研究 教育心理学研究, 35, 171—176.
- 朝生あけみ 1987 幼児期における他者感情の推測能力の発達——利用情報の変化—— 教育心理学研究, 35, 33—40.
- 藤崎真知代 1987 自由保育の効果に関する縦断的研究 2——幼児の有能感・自己像に及ぼす影響—— 日本教育心理学会第29回総会発表論文集, 144—145.
- 福田きよみ・福田 健 1987 見立ての機能と構造の分析——障害児の事例を通して—— 日本教育心理学会第29回総会発表論文集, 52—53.
- 古屋喜美代・田代康子 1987 物語の登場人物と読み手との関わり(4)——物語の視点を特定の登場人物に定めた場合—— 日本教育心理学会第29回総会発表論文集, 40—41.
- 福崎淳子 1987 幼児の上昇音調と下降音調の知覚について 日本教育心理学会第29回総会発表論文集, 34—35.
- 萩尾藤江・中島 誠・川野通夫 1987 乳幼児期における認知の発達と言語発達(2) 2)動作的認知の発達 日本教育心理学会第29回総会発表論文集, 110—111.
- 樋口のぞみ・岡 宏子・白川公子・大島葉子・大野澄子 1987 母子相互関係と子どもの発達(5) 日本教育心理学会第29回総会発表論文集, 334—335.
- 平井誠也・武藤幸穂 1987 幼児におけるML錯視と眼球運動(4) 日本教育心理学会第29回総会発表論文集, 36—37.
- 広利幸治・松本和雄 1987 集団保育と情緒障害児 日本教育心理学会第29回総会発表論文集, 148—149.
- 本郷一夫 1987 相互作用場面における障害児に対する働きかけの効果 日本教育心理学会第29回総会発表論文集, 150—151.
- 一谷聖子・佐々木宏子 1987 乳児における自己認知の発達に関する研究——他者との交わりを通して——(1) 日本教育心理学会第29回総会発表論文集, 228—229.
- 伊藤武彦・田原俊司・朴 媛淑 1987 被動作主をあらわす助詞ヲの獲得 日本教育心理学会第29回総会発表論文集, 208—209.
- 岩田純一 1987 矛盾解消のためのエピソード生成に関する発達 日本教育心理学会第29回総会発表論文集, 130—131.
- 亀田 満 1987 幼児における隠喩的イメージの形成 日本教育心理学会第29回総会発表論文集, 28—29.
- 金田利子・橋本真理子 1987 活動の特質と発達指導(5)——幼児前期から後期への移行過程を中心に—— 日本教育心理学会第29回総会発表論文集, 278—279.
- 川上清文・高井清子 1987 日誌による乳児の行動発達の分析(7) 日本教育心理学会第29回総会発表論文集, 270—271.
- 川野通夫・中島 誠・萩尾藤江 1987 乳幼児期における認知の発達と言語発達(2) 1)情動的認知の発達 日本教育心理学会第29回総会発表論文集, 108—109.
- 小林春美 1987 認知と日本語の助数詞——日米通文化研究—— 日本教育心理学会第29回総会発表論文集, 206—207.
- 古澤頼雄・藤崎真知代・赤津純子 1987 幼児期より思

- 春期に至る縦断的研究(4)——6歳から10歳までの子どもとおとなの自己像, 他者についてのとらえ方——日本教育心理学会第29回総会発表論文集, 230—231.
- 久保ゆかり 1987 矛盾する事象の因果的統合の発達——幼児は手がかりを用いて統合するか——日本教育心理学会第29回総会発表論文集, 132—133.
- 前田美代子 1987 乳幼児の言語発達に関する調査研究第XIII報動作語の語彙発達——助詞とのかかわりを中心として——日本教育心理学会第29回総会発表論文集, 202—203.
- 丸山良平・中沢和子 1987 幼児の数概念形成の諸条件に関する検討(4)——数能力の発達と数 span との関係について——日本教育心理学会第29回総会発表論文集, 280—281.
- 松本真由美 1987 幼児期の母子コミュニケーション——発声—休止サイクルの獲得について——日本教育心理学会第29回総会発表論文集, 96—97.
- 松村暢隆 1986 a 幼児におけるストラテジーの一致と葛藤——自発的測定と数の保存について——教育心理学研究, 34, 247—251.
- 松村暢隆 1986 b 幼児の自然カテゴリーの構造について——典型的評定と所属性判定——教育心理学研究, 34, 332—336.
- 松島恭子 1987 ダウン症乳児の自己意識と他者意識の発達(I)——乳児と他者の補完関係の自意識化と自—他意識の出現——日本教育心理学会第29回総会発表論文集, 1014—1015.
- 南山真美 1987 幼児期における表情表出過程の発達的变化について 日本教育心理学会第29回総会発表論文集, 214—215.
- 三島正英 1986 発達初期の対象概念——見えない置き換え課題における探索の誤り——教育心理学研究, 34, 262—267.
- 宮川充司 1987 在日米国籍幼児の幼稚園への受け入れと適応 日本教育心理学会第29回総会発表論文集, 154—155.
- 宮原和子・宮原英雄 1987 Uzgiris-Hunt 尺度によるものの永続性の発達過程と発話「ナイ」の関係 日本教育心理学会第29回総会発表論文集, 274—275.
- 水谷宗行・仲谷伸子・野村庄吾 1987 新生児における視覚—運動系——生後1週間以内, 1か月, 3か月児における接近対象への反応——日本教育心理学会第29回総会発表論文集, 258—259.
- 森 重敏 1987 幼児の道徳意識の発達に関する基礎研究(第4報) 日本教育心理学会第29回総会発表論文集, 56—57.
- 村井潤一・土居道栄・村井幸子・小山 正 1987 乳幼児の言語・行動発達の機能連関的研究(8)——絵本場面における前言語的行動の発達について——日本教育心理学会第29回総会発表論文集, 100—101.
- 村井潤一・磯部美也子・重村礼子 1987 乳幼児の言語・行動発達の機能連関的研究(9)——絵本場面における模倣の発達と事例検討——日本教育心理学会第29回総会発表論文集, 102—103.
- 村井潤一・鈴岡昌宏・井上智義・引野明子・石井信子 1987 乳幼児の言語・行動発達の機能連関的研究(7)——乳幼児の言語・行動発達質問紙各項目の通過傾向について——日本教育心理学会第29回総会発表論文集, 98—99.
- 村井潤一・田中裕美子・門間淳子 1987 乳幼児の言語・行動発達の機能連関的研究(10)——要求行動誘発場面の行動観察結果について——日本教育心理学会第29回総会発表論文集, 104—105.
- 村瀬俊樹 1987 乳児期後半における物をめぐる意味の場の形成 日本教育心理学会第29回総会発表論文集, 400—401.
- 長崎 勤 1987 生後2年間における伝達行為の発達(2)——Giving 行動の成立過程: 相互行為と実用的伝達行為の関連を通して——日本教育心理学会第29回総会発表論文集, 276—277.
- 中島 誠・川野通夫・萩尾藤江 1987 乳幼児期における認知の発達と言語発達(2) 3) 情動的, 動作的認知の発達 日本教育心理学会第29回総会発表論文集, 112—113.
- 成田朋子 1987 言語の発達と自分の世界の認知の発達(6) 日本心理学会第51回大会発表論文集, 441.
- 西川由紀子 1987 幼児期後半における作話能力の発達の縦断的研究 日本教育心理学会第29回総会発表論文集, 116—117.
- 大久保愛 1987 喃語から初語への発達過程 日本教育心理学会第29回総会発表論文集, 106—107.
- 小野瀬雅人 1987 幼児・児童におけるなぞり及び視写の練習が書字技能の習得に及ぼす効果 教育心理学研究, 35, 9—16.
- 小嶋玲子 1986 幼児における手の機能的左右非対称性とその発達の意味について 教育心理学研究, 34, 274—280.
- 岡 宏子・白川公子・大島葉子・大野澄子・樋口のぞみ 1987 母子相互関係と子どもの発達(3) 日本教育心理学会第29回総会発表論文集, 330—331.
- 大野澄子・岡 宏子・白川公子・大島葉子・樋口のぞみ 1987 母子相互関係と子どもの発達(6) 日本教育心

- 理学会第29回総会発表論文集, 336—337.
- 大竹信子 1987 幼児期の比喩表現の理解の発達——縦断的研究—— 日本教育心理学会第29回総会発表論文集, 50—51.
- 朴 媛淑・田原俊司・伊藤武彦 1987 主題助詞と主格助詞の動作主性の発達: 日・韓両言語の比較 日本教育心理学会第29回総会発表論文集, 210—211.
- 斎藤さゆり 1987 幼児の分割概念の発達について——「はんぶんこ」を出発点として—— 日本教育心理学会第29回総会発表論文集, 282—283.
- 佐々木宏子・金子小百合・深井克彦 1987 幼児の絵のよみとりにおける注視行動についての実験的研究(1) 日本教育心理学会第29回総会発表論文集, 22—23.
- 佐々木宏子・金子小百合・深井克彦 1987 幼児の絵のよみとりにおける注視行動についての実験的研究(2) 日本教育心理学会第29回総会発表論文集, 24—25.
- 白石恵理子・中野悦子 1987 10か月児健診の発達の検討 日本教育心理学会第29回総会発表論文集, 272—273.
- 白川公子・岡 宏子・大島葉子・大野澄子・樋口のぞみ 1987 母子相互関係と子どもの発達(4) 日本教育心理学会第29回総会発表論文集, 332—333.
- 庄司留美子 1987 高度難聴児のことばの発達(2)——2歳までの対人関係の発達と伝達行動—— 日本教育心理学会第29回総会発表論文集, 1042—1043.
- 須田 治 1987 3歳—6歳児のフラストレーションマネジメントの研究 日本教育心理学会第29回総会発表論文集, 216—217.
- 鈴木情一 1987 2歳児の比喩的再命名に関する事例的研究(2)——groundの分析—— 日本教育心理学会第29回総会発表論文集, 48—49.
- 鈴木孝子 1987 幼児の情報理解における整合性の吟味と文脈予期 教育心理学研究, 35, 132—140.
- 鈴木敏昭・福田香苗 1987 文のあいまいさの意識の発達——対象指示表現に関して—— 教育心理学研究, 35, 17—25.
- 平 直樹・武井澄江・荻野美佐子 1987 適応形質問紙形式による乳幼児の言語理解力測定を試み 日本教育心理学会第29回総会発表論文集, 114—115.
- 竹内伸宜・井上雅子・古澤頼雄 1987 乳児期母子相互作用の様式 日本教育心理学会第29回総会発表論文集, 328—329.
- 竹内謙彰 1986 幼児における継次情報の処理と保存の発達 教育心理学研究, 34, 280—284.
- 田丸尚美 1987 幼児における役割行動の発達 日本教育心理学会第29回総会発表論文集, 310—311.
- 玉瀬友美 1987 幼児の物語記憶に及ぼす方向づけ教示の効果 日本教育心理学会第29回総会発表論文集, 42—43.
- 田村あおい, 三宅和夫 1987 乳児の泣きの特性が介入行動に及ぼす影響 日本教育心理学会第29回総会発表論文集, 326—327.
- 田代康子 1987 物語の登場人物と読み手との関わり(3)——登場人物との「共体験」の検討—— 日本教育心理学会第29回総会発表論文集, 38—39.
- 塚本妙子 1987 乳児の泣き(2)——泣き声の分割判断における知覚的基準について—— 日本教育心理学会第29回総会発表論文集, 324—325.
- 内田伸子 1987 物語から文字作文へ——文字作文の成立過程—— 日本教育心理学会第29回総会発表論文集, 118—119.
- 瓜生淑子 1986 1, 2歳児における非日常的内容の「対象語—行為語」構文について 教育心理学研究, 34, 306—314.
- 脇中 洋 1987 幼児・児童の「非概念的関係づけ」 日本教育心理学会第29回総会発表論文集, 300—301.
- 渡部雅之 1987 空間表象の変換能力に関する発達の研究——下位概念との関連から—— 教育心理学研究, 35, 107—115.
- 渡辺弥生・瀧口ちひろ 1986 幼児の共感と母親の共感との関係 教育心理学研究, 34, 324—331.
- Willenborg, S. 宮田 1987 疑問表現の発達 I 日本教育心理学会第29回総会発表論文集, 200—201.
- 山本淳一 1987 自閉児における教示要求表現の形成 教育心理学研究, 35, 97—106.
- 山本政人 1987 a 物の受け渡し課題で見る乳児の対人理解の発達 教育心理学研究, 35, 74—78.
- 山本政人 1987 b 乳児における視線の共有と指さしへの反応 日本教育心理学会第29回総会発表論文集, 260—261.
- 山本利和, 上村幸子, 賀集 寛 1987 幼児における2種類の空間能力の発達とそれに及ぼすランドマークの効果 教育心理学研究, 35, 163—170.
- 横山正幸 1987 所有の意味関係の理解と生産の発達過程 日本教育心理学会第29回総会発表論文集, 204—205.
- 吉水ちひろ 1987 2歳児の象徴遊びと言語(II)——スク립トの発達にみられる個人差—— 日本教育心理学会第29回総会発表論文集, 54—55.